

筑波キャンパス・ラビリンス

椎名 健

図書館情報大学教授

巻の声

筑波大学ってどんな大学？これについて、ある受験生の母親から聞いた言葉を思い出す。

「とオツても偏差値が高い大学でねエ。うちの子はセンター試験に失敗したアで、今年はだめですウ。でも、筑波大学に受験に行って感激して帰ってきたアですウ。ねエえ、大学の環境がとっても素晴らしいで、来年もチャレンジするウて、絶対に行きたいイて、うちの子はいウですウ。私もねエ、子どもがしたい様にすればいいと思ウですウ。」鳥取弁でこのように筑波大学を絶賛し、勉学に優れた環境だと溢れる思いを語っていた。地方の小都市から来た受験生は、広いキャンパスに圧倒されたことであろう。受験シーズンである冬のキャンパスはそれほど魅力的とも思えないが、どんな所が心を捕らえたのであろうか。その後の受験生については何も聞いていな

い。つまり、こんな声を心に宿して全国から希望に燃えた青年たちが筑波大学に集い、勉学に動んでいるに違いない。

アカデミックな世界でも優れた研究が展開されており、それぞれの分野で第一線の研究者として活躍される諸先生に教えを受ける、と、そう学生たちが認識して誇らしく感じていることであろう。とりわけ、20世紀最後の年に、ノーベル化学賞が白川英樹名誉教授に授与されたことは、筑波大学生の志気を大いに高めたに違いない。一人が世界の頂点に立った背後には、学術的すそ野の厚さと広さが推測される。

ノーベル賞のニュースが飛び込んでから数日後、学生たちの談話に次のような面白いやりとりがあった。

「テレビで見ただけど白川英樹先生って、全然普通っぽいやね。」

「そうそう。退職して楽しみにしていたのが趣味の土いじりだったそうよ。」

「頭に麦わら帽子、腰にタオルなんて似合いそう。」

「気取らない人だから、ノーベル賞の偉人っぽくないし。」

「あれって、筑波大のカラーかな。」

「ちょっと違うよね。お人柄でしょう。」
でも、朝永振一郎さんも気取りのない方だったと聞いている。ひょっとしたら筑波大のカラーになるかもしれない。

異邦人感覚

多くの新参者が同じ経験を味わったようであるが、初めてつくば市をドライブして回った印象はいささか腹立たしいものがあった。二叉路の道路、どこを走っても変わり映えしない街路等は、人が適応的な認知地図を作ることを許さない。新しい道に入ると、すぐに自分の位置を見失う。しっかり異邦人感覚を味わった。それではと公共の乗り物で動こうと思ってもみたが、これがまた惨めな状況だ。こんな話しがある。住民登録に市役所へバスで行った。ところが、帰りはバス連絡が悪く、終に谷田部から学園まで歩いてしまったという、中年のおばさんがいた。結局、つくば市では移動をマイカーに頼らざるをえない。車を持ってしまえば公共の乗り物に関心が向かない。この悪循環…。

筑波大学の構内を車で走ったときに異邦人感覚は頂点に達した。うららかな春の陽に誘われて、大学キャンパスを散策しようと思ひ立ち、車で出かけた。樹木が青々と茂った環境は悪いものではなかったし、どこから大学で、どこから学外になるのか定かでない不明瞭さも面白く、どちらかという気に入った。ところが、最初のイライラは外来者用の駐車場が見つからないことで始まった。さらに、街路樹などが視界を閉ざすので自分の位置と目標を失う。たちまち暗い、長いラビリンスに迷い込む。視野が開けて、大きなパラボラアンテナを見た。白いお盆の中には雑草が茂っていた。行きつ戻りつするうちに、大通りに出てしまったので、そのまま帰った。その後も何回か道を間違えた。

ラビリンス

開かれた大学というイメージは、国際サイエンス都市つくばを代表する筑波大学に最も相応しいものだと思う。

そこで、一度、冷静にラビリンスの原因を突き止めておこう。一体、この迷宮感覚をもたらすものは何か。一つには広いキャンパスから来る印象であろう。我が図書館情報大学の22倍を超える敷地面積を、車とはいえ、徘徊した際の体感が第

一印象を形成した部分は大きい。それに
加えて豊かな樹木が、四方へ伸びる視線
の先を断ち切るの、否が応でも閉塞感
を生む。しかし、これは樹木それ自体の
せいではないぞとも思う。もしも視界の
中にシンボルの構築物が見えていたら、
かなり印象も違ったであろう。残念なが
ら、外來者にはこれといったランドマー
クが見当たらないのだ。キャンパスの認
知地図よりも先に、不安と焦燥感が生ま
れる。広いキャンパス、どこも同質の街
路樹、無個性な建築物、そして駐車場を
始めとする案内表示の乏しさが、鬱々た
るラビリンスの源になっているのだ。

図書館は大学の活力

図書館情報大学に身を置く者として、
図書館と情報の利用便には最も関心が向
く。実は、着任して本学の図書館の弱体
さにはショックを受けた。しかし、それ
は個人的な研究分野のことで、図書館情
報学関係の図書と学生一人あたりの図書
数という点では恵まれたものだと知っ
た。個人的な不満が解消されたのは筑波
大学図書館が利用できたからであった。

さて、筑波大図書館の魅力の第一は、
総合大学として、一つのキャンパスに多
数の研究分野が集まっていることに拠る
であろう。もちろん学生数の多いことと

も符合する。それだけ専門の雑誌や図書
が多くなる。第二の魅力は、図書が研究
室に分散することなく中央図書館が集中
管理していることだ。ただ、一部は医学
と体芸図書館に分散している点に不満が
残る。とはいえ、3館とも自転車で動け
る範囲にあることを良しとしよう。第三
の魅力は、開館時間が長いことである。
図書館の利用便の良さは開館時間と関係
する。大学によっては図書を研究室ある
いは学科単位で抱え込むという慣例が絶
えない。その理由は、蛸足大学、スペー
スの不足、そして、開館時間が短いこ
とを挙げることが多いらしい。

一つ付言すると、新刊専門誌だけを研
究室等が保持しているが、図書館に新刊
ジャーナルコーナーを設けて万人の閲覧
を可能にして欲しい。これは欧米の大学
図書館では普通のことである。今、多く
の分野の研究者や大学院生が学際的に勉
強する。新刊ジャーナルを含む図書の中
央集中管理は欠かせない。

実に図書館は、大学の活力源泉である。
地方国立大学を含めて、小さい大学が世
界の水準から乗り遅れる最初の分岐点は
図書館の貧しさにあると断言してよい。
それだけに大学内外から筑波大図書館に
期待するところは大きい。

大学構成

「ところで、筑波大学のホームページ見たことある？学群、学類、学系というのはややこしいが、研究と教育を組織分けしたところが特徴らしいね。」

「それで事態は単純になったの？それとも複雑になったの？」

「専門分野を越えた教育体制が組みやすいというメリットがある。会議は増えそうだけどね。」

「現実には研究と教育は切り離せないでしょう？何か、両者を一体化した学部制より優れた評価が出たのかな。」

「大学の個性として見ればいい。それより、大学院も複雑そう。専門家養成の修士大学院と研究者養成の5年制博士大学院を分けている。」

「同じ人間が教育に当たるのに、専門家修士と博士前期で別の教育するの？」

「担当教官は別らしい。メリットは2年生大学院では学生を気楽に取れる。学生から見たらどうなっているの？丁度3Dグラフィックスで回転して見るように、横から、向こうから、そして鳥瞰図的に見た図も必要だということだ。」

「よそ者にはよく見えないよな。」

「これって、キャンパス迷路にオーバーラップするものがあるねえ。」

63歳定年と助手制度

「筑波大は63歳定年を死守するんか？」

「東大や東工大も65歳定年になったし、時間の問題だね。定年が遅いと大学の活力が落ちるといけど、杞憂だね。山陰では島根大が63歳、鳥取大が65歳だけれど、活力とは関係ないようだね。」

「本音は第二の職場に行き易いこと？」

「もう時代は変わってしまった。」

「筑波大学では初め助手がなかったらしい。それが、今では復活している。」

「助手制度は問題が多い。助手を排して、自立した教官にした方がいい。これも世界の常識だろう。」

議論は盛り上がっているが、紙面が尽きたので、続きは別の機会に譲ろう。

(しいなけん 実験心理学)